

# 整形外科外来だより

No 22 2011/10/15 けいゆう病院 整形外科 発行

## ◆ 異動のお知らせ

2年間にわたり当科で精力的に活動してきた阿部医師が、9月末をもって異動・退職しました。阿部医師が主治医となっておりました患者さんには、担当医が変更することでご迷惑をおかけすることになりますが、ご理解の程よろしくお願ひ申し上げます。10月からは白澤医師が赴任しました。阿部医師の引き継ぎで月曜日の再診と水曜日の初診を担当します。整形外科一般診療に関わりますが、得意分野は肩関節や骨折などの外傷です。よろしくお願ひ申し上げます。

## ◆ 痛み止めのお薬について（その1：消炎鎮痛剤）

整形外科では、様々な痛み止めの薬が処方されますが、その多くは消炎鎮痛剤(非ステロイド系抗炎症剤)といわれているグループに属します。内服薬・坐薬など全身に効果がある薬と湿布・塗り薬など局所に効果がある薬があります。今回は、内服薬を中心に全身に作用する薬に絞って話をしたいと思います。

当院では、内服薬だけでもロキソニン、セレコックス、ボルタレン、ハイペン、ロルカム、ペオン、モービックなど非常に多くの種類があります。どの薬がいいか悩んでしましますが、基本的には痛みを止めて、炎症を抑える効果があります。炎症が起こっている状態（打撲や骨折などの怪我や急な腰痛、関節痛など）に最も効果が期待できます。イメージとしては、火事が起こった際に水をかけるような効果があります。副作用を恐れすぎないで効果が期待できる場合は、積極的に内服することで早期の鎮痛効果につながります。また、薬の種類によって効果の強さやスピード(内服してから効果が出るまでの時間)、継続時間、副作用に差があります。そのような薬剤の特徴を踏まえて主治医が患者さんに適した薬を選択しています。

一方では消炎鎮痛剤は副作用のある薬であり、薬の効果がない場合もしくは痛みが改善している場合に漫然と内服することは避けるべきです。副作用には胃腸障害・腎障害・肝障害などがあります。胃薬を飲んでいるから大丈夫、坐薬だから平気、長期間使用しているのに何も起こらないから今後も心配ないというわけではありません。長期間内服している場合は、可能な範囲での減量や副作用の少ない薬剤への変更について主治医と相談して下さい。副作用を恐れすぎず、侮らず、上手に薬を使いましょう。

(文責 川崎俊樹)